

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4271401699		
法人名	特定非営利活動法人 しまばら		
事業所名	グループホーム諏訪の里		
所在地	長崎県南島原市深江町丁1520番地		
自己評価作成日	令和4年 12月 3日	評価結果市町村受理日	令和5年2月27日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kaigokensaku.jp/42/
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 福祉総合評価機構
所在地	長崎県長崎市宝町5番5号HACビル内
訪問調査日	令和5年 2月 2日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

眼下に有明海、背後には雲仙普賢岳が見え、国道から少し入ったところにあるため、とても静かな環境にあります。日当たりも良く、洗濯物はすぐに乾き、乾いたタオルや衣類など入居者が畳んでくださり、日常生活の一部となっております。
また、テラスでは、プランターに花を植えたり、おやつを食べながら日向ぼっこをしたりと楽しんでます。
1ユニット、入居者様9名の小規模で、入居者様は全員女性という事もあり、ゆっくりとした時間が流れ、お部屋で過ごされたり、フロアでテレビ鑑賞されたり、昼食後は居室で昼寝をされたりと、それぞれの時間を過ごされています。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

豊かな自然環境のもと、「ともに喜び、支えあい、誇りを大切に、心と体を大切にしながら暮らせる家庭的な場の提供」を理念としている。事業所では、入居者の生活の質の向上のため、些細な変化も見逃さず、職員が協働してケアの実践に努めている。法人内の身体拘束禁止委員会の取組や積極的な研修体制により、職員のスキルアップを図っている。法人全体でICT化を進めることにより、入居者の状態を確実に把握し、サービス向上に寄与している。「人や国の不平等をなくそう」というSDGsの取組として、外国人留学生を夜勤アルバイトとして受け入れており、互いの文化を尊重し、それぞれのよさを活かすことで介護の現場が活性化されていることがわかる。入居者の幸せを願い、細やかなケアに努め、「喜喜心体」を目指している事業所である。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印
56 職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	63 職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができています (参考項目:9,10,19)	○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57 利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64 通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○ 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58 利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65 運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○ 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59 利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66 職員は、生き活きと働いている (参考項目:11,12)	○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60 利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67 職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61 利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68 職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62 利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I.理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	2019年より当法人となり、管理者、職員ともに当法人理念を理解し日々実践している。	法人理念を「喜誇心体」で表している。管理者は職員と共に、日々の生活の中で「入居者のために」という思いを共有している。管理者は、入居者の心身の状態をしっかりと観察し、細かな変化も見逃さずにケアを実践している職員の姿に理念の具現化があると考えている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	近隣の住民の方などに挨拶などはおこなっているが、コロナ禍でもあり地域の行事の参加が難しい。	コロナ禍の影響、地域の自治会長が2年毎に交代することもあり、地域との付き合いは挨拶程度に留まっている。その中でも、法人カレンダーを配ったり、クリスマスイルミネーションを見に行ったり、近所の商店からアイスケーキを購入したりしている。今後、地域との日常的な交流が望まれる。	グループホームの存在意義や留学生の活動等を地域に知ってもらい、事業所のよさを発信すると共に、地域の力をサービス向上に活かしていく手立てが望まれる。
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	外出など積極的に行っているが、行事や活動への参加はコロナ禍の状況で難しい面もある。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	ホームでの行事や入居者様の生活や活動写真とともに報告している。また、会議の議事録は玄関に設置のipadにて閲覧できるようにしている。	年6回、規定の委員で構成しており、コロナ禍のため対面ではなく書面会議を行っている。年度始めには身体拘束に関する指針を同封し理解を促している。書面会議の内容は、入居者の状況やコロナ対策などを丁寧に説明しているものの、事業所からの発信に留まっている。	書面会議であっても運営推進会議を構成する各委員の意見やアイデアをサービス向上に活かすために、双方向でのやり取りができる手立てについて検討、工夫が望まれる。
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者とは日頃から連絡を密に取り、事業所の事情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	市町村には疑問点があれば、相談したり書類提出時などにも尋ねたりして協力関係が出来ている。	介護保険に関わることは広域市町村圏、コロナ対策や入居者にかかる相談は行政担当課と電話・メールでやり取りしている。県・市・包括支援センターから研修情報を得ている。また、近隣の病院が連携してリハビリに特化した研修会を開催しており、職員研修に活かしている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	原則玄関の施錠は常時行わないが、コロナ禍でもあり接触記録を残す目的で、現在玄関は施錠している。身体拘束に関する勉強会を行い職員が理解し取り組んでいる。身体拘束廃止委員会を設置し毎月検討会議を実施している。	法人の身体拘束廃止委員会を中心に、ケアの実践に努めている。法人総括施設長・医師・看護職員・生活相談員も委員会メンバーとなっており、事業所の現状をしっかりと確認している。全職員がオンライン研修を受講し、年2回の自己評価を行っている。入居者の安心安全な生活を守るための法人全体の取組は、優れた点である。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	虐待防止委員会を設置し毎月検討会議を実施し、法人内外の勉強会にも参加している。また、職員間での声掛けや入居者様の観察を行い防止に努めている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	法人内での勉強会を行っている。必要性に応じて支援していく。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約時に十分な説明を行い、家族の理解・納得された後で同意を得ている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	ご家族の希望に合わせ、LINEや電話で近況報告やしゃしんのゆうそうなどを行っている。その際、ご家族からの要望があれば解決策を見出している	コロナ禍のため、家族の面会は事前連絡を得て時間を設定している。面会では近況を報告するとともに意向等を聞き取っている。また、入居者の通院介助の協力を希望する家族には主治医への伝言を託している。毎月の便りに個別に行事等の写真を同封しており、好評である。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	面談や必要に応じて、その都度話し合いを行っている。コロナ前は法人職員の懇親会があり、場を通じても意見を聞いていた。	職員育成の仕組みとして、年度始めに職員は個人目標を前後期で振り返り自己評価を行っている。管理者は毎日声を掛けており、普段からコミュニケーションを図っている。夜間アルバイトの外国人留学生には、職務内容が十分理解できるよう丁寧に説明するとともに母国語での説明書も作成してサポートしている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	年2回の自己評価をもとに個人面談の実施や法人内の勉強会に参加し個人の能力向上に努めている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	法人勉強会にて議題に合わせたフォローアップ研修を視聴し、確認テストを行ったり、OJT評価の実施などにて技術向上を行っている。法人外の研修を受講する際には勤務体制を整えている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	居宅や病院連携室など問い合わせがあった際に情報を提供しあったり、訪問の機会があれば訪問し情報を共有している。		
II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入所の相談の時より、ご本人との面談を何度も行き意見を傾聴している。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	入所の相談の時より、ご家族とも面談を何度も行き、意見を傾聴している。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	ご本人とご家族の両方にとっての最善の方向を見つけ支援に繋げている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	座ってできること(洗濯物たたみやタオルたたみなど)手伝ってもらっている。昔の生活など日々の会話やレクリエーションの際に教えて頂いている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	職員も常に家族と話し合いながらご本人とご家族の絆を大切に支援している。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	自宅への外出や行きつけの美容室、通院付き添いなど、ご本人やご家族の希望に添って対応している。	入居前から利用している美容室に通う入居者には家族が同行し支援している。コロナ禍の中、昔馴染みの人の訪問や家族とのドライブ、法事、墓参り、親戚との会食など、馴染みの人や場との関係を大切に支援している。入居者宛の年賀状が届き、返事を投函している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せず利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	レクリエーション活動や入居者様との会話などを通じて入居者様同士でのコミュニケーションが取れるよう、職員が間に入って支援したり、気の合う方とテーブルを一緒にしている。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	入院などで退所されても今後の方向性などについて家族や医療関係者などとともに面談を行い、継続的な関係を保つよう心掛けている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	日常生活の中でコミュニケーションをとりながら本人の希望や要望をくみとりながら、一人一人に合った生活が出来るよう検討している。	職員は日々の支援の中で、入居者の生活歴や困っていることを聞き取っている。認知症の症状が顕著な場合は、本人の様子を見ながら会話を工夫しコミュニケーションを図っている。帰宅願望の強い入居者には、職員がさりげなく見守り、声を掛け落ち着くように支援している。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	コミュニケーションの中でその人らしさやご本人やご家族から聞き取りした聴取した、現在に至るまでの生活歴も把握している。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	日常生活の様子観察やバイタルチェックなどで総合的に把握するよう努めている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	本人や家族の意見を十分取り入れている。また、全職員がいつでも閲覧できるようファイリングし、モニタリングや見直し、評価を行っている。	ICT機器の活用により、入居者のバイタル等生活状況を確実に記録している。さらに、職員のスマートフォンと連動した見守りセンサーでケアプランの実践状況が確認できる仕組みがある。職員は、家族との連絡時や日々の支援の中で本人の思いを聞き取っているものの、介護計画内の本人・家族の意向への反映が見られない。	職員が聞き取った思いや意向を計画作成担当者に伝え、計画に反映する仕組みづくりに期待したい。
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	記録や申し送りにて情報の共有を行っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	多機能性を生かした支援は必要な状況に応じ柔軟に支援するよう心掛けている。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	法人内外のネットワークを活用し安全に暮らせるよう支援している。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	入所後もご本人及びご家族の希望を大切に、かかりつけ医を継続し、連携を図っている。	事業所の協力医の他、近隣の総合病院や入居者のかかりつけ医と連携している。法人の看護ステーションから訪問看護師が週1回来所し、入居者の状態を見守っている。家族の通院付き添いができない時には職員が対応している。夜間緊急時には、多言語対応のマニュアルを整備し対応している。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	毎週1回訪問看護訪問あり。1週間の気づきや体調面など相談したり、来所日以外でも訪問看護へ連絡、相談、報告を行い支援している。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院時は、面会制限があるため、医療連携室へ状態伺いの連絡を入れ情報交換しながら連携をとっている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所のできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	主治医やご本人、ご家族や関係者などと話し合いのうえ、方向性を検討している、	これまでに事業所での看取りの例はない。入居時に重度化・終末期に向けた支援方針を説明し、同意を得ている。終末期に改めて家族と方針を共有している。今後は家族の希望に沿って、主治医の往診、職員体制、夜間時の家族の協力等が可能であれば、看取りも検討したいと考えている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	マニュアルの周知や、緊急時の対応などの勉強会は行っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を日常的に防火管理及び消火、避難訓練等を実施することにより、全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている。 また、火災等を未然に防ぐための対策をしている。	年2回の総合避難訓練の実施を行っている。また毎月のスタッフミーティングでは消防の年間の計画に沿って災害に対する意識を高めている。	防災計画を策定し、年2回日勤・夜勤対応の火災時の避難訓練を実施している。コロナ禍のため、消防署の意向で立会いはない。自然災害の時には、事業所内避難も想定しており、食料や水を備蓄し、ガスコンロや自家発電機を整備している。今後、避難所への輸送方法、本人確認証の作成などを検討している。	
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	常に尊厳の気持ちを持って接するよう心掛けている。また、プライバシーの確保や守秘義務は徹底しており勉強会も行っている。	職員は入居者の尊厳を重視し、呼び掛けは苗字や名前にさん付けとしており、本人が心地よく過ごせるように努めている。また、入居者の羞恥心に配慮し、失敗した時も職員間でさりげなく対応している。事業所は、運営推進会議に提出する行事等の写真は入居者の顔は出さないよう配慮している。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	生活の中での思いや希望などを理解し、自己決定が出来るような支援と心掛けている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	各自のペースをもとに、本人の希望に沿った支援が出来るよう努めている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	毎日の洋服や行事、外出など衣類を選んで頂いている。またお化粧品や自分で出来る方は髪を梳いて頂いている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	食事用のエプロンをたたんで頂いたり、使用したお盆を拭いて頂いたり、出来る範囲でのお手伝いをお願いしている。	昼と夜は外注食を提供している。本人の体調に合わせてトロミをつけたり、キザミ食にするなど配慮している。お茶の飲み込みが難しい時にはゼリー状にして提供している。本人の好みを把握し、嫌いな食材も工夫しており、例えば温泉卵が苦手な場合は、電子レンジで温めて茹で卵にすると食が進む等の例がある。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	職員が一人一人の摂取状態観察を行っている。また、食事以外でも水分補給をして頂き、お茶ゼリーにて対応するなど工夫している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後の口腔ケアを徹底し、義歯は週一回洗剤を使用している。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	個々にあった排泄用品を使用し残存機能を活かしながら排泄の自立に向けた支援を行っている。	事業所内に広々とした2ヶ所のトイレがあり、車椅子でも安心して利用できる。パッド類はトイレ内ではなく、所定の場所に保管しており、プライバシーに配慮していることがわかる。職員は排泄チェック表で定期的に誘導している。リハビリパンツにパッドの利用を維持しており、オムツにならないよう支援している。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	アクティビティや体操などへ参加して頂き適度な運動を行っている。また、夏場はアクエリアスを作り、いつでも提供できるようにしている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	入浴時間など、体調に合わせてたり希望を伺いながら対応している。	現在は、入居者も職員も全員女性であるため同性介助での入浴支援となっている。週6回入浴を準備し入居者は週3回入浴している他、入浴日以外は清拭を行い、清潔保持に努めている。好みのシャンプー類にも対応し、季節のゆず湯や菖蒲湯も提供している。職員と1対1での入浴は入居者の楽しみとなっている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	一人一人の生活リズムに合わせて対応している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	処方されている薬の目的や用法を把握し、症状の変化があれば主治医や薬剤師に相談し対応している。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	日々の生活の中で、生活歴や趣味等に応じた支援をしている。また、体操やレクリエーションなどで気分転換を図る機会をつくっている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	希望に添って対応している。 ご家族の協力のもと、外出などの支援も行っている。	事業所の日配品等の買い物では、入居者に声を掛けており、出掛ける希望がある時には一緒に外出している。コロナ禍で以前のような外出は難しいものの、職員は入居者がプランターに花の苗を植えたり、広いテラスで外気浴を楽しめるよう支援している。季節の花見には少人数に分かれて出掛けている。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	ご家族と相談し希望に応じて対応している。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	ご希望に合わせ、電話や手紙のやり取りが出来るようお手伝いしている。ご希望の家族にはLINEなどで近況報告を行ったりテレビ電話もしている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	フロアには朝から日差しが差し込み、日当たりが良く、ゆっくり過ごされている。季節の花をプランターで育てており、フロアには季節に合わせた利用者様と作った作品が飾ってある。その時の利用者様に合わせた共用の空間になるよう配慮している。	リビングルームの窓からは眉山・普賢岳、有明海が眺められ、入居者は温かな日差しを受けてゆったりと過ごしている。隣接する和室には床の間に掛け軸が飾られ、コロナ禍以前は昼寝する場所であり、行事の際の催し物の舞台としても使っていた。フロアからテラスに出ることが出来、入居者は外気浴を楽しんでいる。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	居室は個室のため、一人一人の空間が保たれている。また、共同の空間では他者とのコミュニケーションが取れるよう、職員が心掛けている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	ご入所の際に使用されていた家具や使い慣れた生活用品などを持ち込んで頂き、安心して過ごせる居室作りを心掛けている。	居室入り口には入居者の姓を記した表札を掲げ、自宅玄関のような雰囲気を醸している。職員手作りの季節の造花を花束にして、ベッド横の棚に飾っている。私物は備え付けのクローゼットに収納し、人目に触れないように心掛けている。電動ベッド・見守りセンサーの導入により、介助の際の安全が高まっている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	安全対策に十分留意し、自立した生活が送れるように工夫をしている。		